

『円頓寺映画祭 2010』 報告

渡辺悠平・村松里実

1. 映画祭概要

“円頓寺映画祭”は「名古屋の映像文化の発展」と「商店街の活性化」という二つの目標のもと、メディアプロフェッショナル・コースに籍をおく学生と名古屋大学映画研究会のメンバーが中心となり、2009年に発足したプロジェクトである。同商店街で映画を上映することで生まれる、新たな人の流れの創出や映像シーンの高揚を目指した活動を行っている。

第二回目となる今回は、前年度の反省を大きく取り入れたものとなった。例えば上映作品に関していえば、地域の一般市民や学生、若手クリエイターによる自主製作映画を広く募った昨年のような募集形態から一転、“山形国際ドキュメンタリー映画祭”や“びあフィルムフェスティバル”といった、第三者映画祭からの招待作品を数多く扱い、上映作品のラインナップの充実を図っている。また9カ所に散らばっていた上映会場を計4カ所に集約したことは、会場間のスムーズな往来を実現した。こうした「上映作品」と「視聴環境」の二つの面での質の向上が、映画祭そのもののクオリティを一層高めることに寄与したことは明らかである。

尚、映画祭期間中の二日間では350人程の来場があり、会社帰りのサラリーマンやデート中のカップルなどいつもの町並みでは見られないような世代、年代の人々を確認することができた。

2. 商店街で行う映画祭

昨年度から引き続き、会場として名古屋市西区に位置する円頓寺商店街の協力を得ることができた。そしてこのことが本映画祭の骨子となっているつまり映画館のような既存の上映施設ではなく、何の変哲も無い商店街を会場として構えていることが、この映画祭一番の特徴といえよう。

円頓寺商店街は名古屋市界隈では歴史のある商店街なのだが、かつてのにぎわいも今は影を潜め、平日は通勤者の通り道、休日ともなると閑古鳥が鳴くといった状況である。

このように半ばシャッター街と化した商店街というのは全国的によく見られるケースではあるが、しかし単純にそれだけをもってこの商店街が魅力に乏しい場所であるとは言えない。例えば一つ角を曲がっただけで、まるでさっきまでの距離感から見放

されてしまったかのように感じる路地の作り。日向のまぶしさとも木漏れ日の心地よさとも違う、アーケードを通して届くぬるい光。その足下に広がるのは、度重なる舗装によりなにか幾何学的な模様が浮かぶアスファルトーこのように円頓寺商店街を少し注意深く散策してみると、いかにこの空間が歩くものの創造的な心を揺さぶる場所であるかが分かる。

事実今年の映画祭で上映された「おはし行進曲」(チェ・ヒョンミン監督作品)は、円頓寺商店街からインスパイアを受けた監督が、同商店街にある飲食店「庵ひろ」を舞台に撮影した短編映画作品である。映画祭最終日には監督を交え、この地で映画を撮影した学生らによるトークイベントが繰り広げられるといった展開もあり、この場所以で映画祭を行う意義を改めて見つめ直す機会となった。

3. 円頓寺映画祭へ向けての準備

3.1 使用会場との交渉

上映会場である、「名鉄イン 名古屋駅前」、「レストラン 庵ひろ」、「喫茶 まつば」、「ふれあい館」の使用に当たって、映画祭開催の意図や目的などをわかりやすく提示し、交渉することが重要となった。結果、どの会場の方からも共感を得ることができ、無償でお借りすることができたため、映画祭自体も参加無料で開催することが可能となった。

円頓寺の人々の暖かさ、寛容さ、また、円頓寺を活性化したいという思いを多いに感じた。

3.2 上映作品の選定

前述の通り上映作品は、昨年のような公募作品中心ではなく、招待作品中心にするという試みをした。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」、「ぴあフィルムフェスティバル」などから受賞作品を招待し、全体の作品数も厳選した。その結果、細かい上映スケジュールを作成することができ、前回と比べて来場者の人々も鑑賞しやすかったのではないかと思われる。

また、スケジュールが細かく決まったことで、トークイベントなどの設定もしやすく、映画祭に厚みができてきたと感じられた。一方で、公募作品をもっと上映してほしいとの声も伺ったので、来年以降は公募作品と招待作品について、バランスの取れた選定をしていくことが重要な課題だと考える。

3.3 映画祭の広報

開催告知は主にポスター、ホームページ、ビラ配布によって行なった。また、新聞社、ラジオ、テレビ局に幅広くプレスリリースを配布し、新聞は中日新聞、名駅経済新聞